

研究タイトル
乳糖不耐症患者の牛乳漸増負荷による腹部症状軽減に関する検討
研究者名（所属先） <ul style="list-style-type: none"><li>・長谷川茉莉(東京女子医科大学東医療センター小児科)</li><li>・岡田和子(岡田小児科クリニック、東京女子医科大学東医療センター小児科)</li><li>・永田智(東京女子医科大学小児科)</li><li>・中村禎子(十文字学園女子大学大学院人間生活研究科食物栄養学専攻)</li><li>・川井泰(日本大学生物資源科学部動物資源科)</li><li>・杉原茂孝(東京女子医科大学東医療センター小児科)</li></ul>
<b>【目的】</b> <p>乳糖不耐症(LI)は、日本人に多いと言われているが、腹部の自覚症状だけでの調査が多く、種々の原因が混在している可能性があるため、乳糖摂取が原因の乳糖吸収不全(LM)の診断を要する。一方、LMの治療は、牛乳を継続摂取することで耐性が獲得され、腹部症状が改善されるという報告が海外では散見されるが、日本人での報告はないため、今回検討した。</p> <b>【方法】</b> <p>アンケート調査において牛乳・乳製品摂取で腹部自覚症状(LI症状)を有するものの中から、心因性症状を鑑別するために、一般牛乳と乳糖減量乳飲料での200ml単盲検比較試験(SBCS)を行い、さらに、LMの確定診断には、呼気水素ガス濃度測定による20g乳糖負荷試験(20gLHBT)を実施した。</p> <p>牛乳漸増負荷治療は、LM症例を対象に、牛乳30mlから開始し、4-7日で漸増し200mlまで継続摂取させた。また、治療前後の、自覚症状の改善度、20gLHBTの診断値の変化、便中腸内細菌叢の変化(16S-rRNAによる解析)について比較検討した。</p> <b>【結果】</b> <p>LI症状を有する46例を対象にした。SBCSの結果は、陽性22例(47.8%)、陰性4例(8.7%)、評価困難群は20例(43.5%)であった。また、LMと診断されたのは35例(76.1%)であった。牛乳漸増負荷治療は、同意が得られたLM32例を対象に行った結果、治療期間は平均41日で、最終的な症状改善は29例(90.6%)に認められた。治療後のLHBTの診断値の改善は約1/3に認めたが、半数は変化がなかった。治療前後の便中腸内細菌叢の解析では、32例全体では、Clostridiales Lachnospiraceae [Ruminococcus] で有意な減少が認められた。また、最終症状が著明に改善した7例では、Blautia 属の有意な増加が認められた。</p> <b>【結論】</b> <p>LI症状を有する46例中、20gLHBTでLMと診断されたのは、35例(76.1%)であった。本研究の牛乳漸増負荷治療は、日常生活に支障をきたさずに実施できるLMの有効な治療法の一つである。</p>